

オバデヤ書

この書は21節しかなく、聖書の中で1番短い書になります。

一見すると明るい書ではなく、イスラエルから見て

死海の向こう側にする隣国エドムに対する裁きの詩が羅列されています。

しかしこの書は奥深く、それを学ぶためにはまず背景を知ることが必要です。

エドム人はイスラエル人と先祖が同じと言う点で特別な民族です。

2つの民族はアブラハムとサラの家系に連なりますが、

アブラハムは息子、イサクとその妻リベカの間には

ヤコブとエサウと言う双子が生まれました。

創世記はこの日（いわ）く付きの双子が緊張関係にあったことを

記しています。

2人は後にイスラエルとエドムという名を授けられ

これがそれぞれの子孫である民族の名前になり、

2つの民族は先祖と同じように難しい関係にありました。

何世紀にもわたって厳しい緊張関係にありながら

同じ先祖を持っていると言うつながりは断てなかったのです。

しかし、そのようなつながりもバビロンに対するエルサレムの

陥落と言う悲劇の中で砕け散りました。

イスラエルがバビロンによって征服された時、エドムの人々は、

それに乗じてイスラエルの町々を占拠し、

イスラエルの難民を捕らえたり、殺したりしたのです。

他の預言書で、神はイスラエルの近隣諸国に責任を問うていますが、

ここでオバデヤがエドム人と同じようにしています。

この短い書は2つのセクションに分けられます。

最初のセクションは、エドムの指導者たちの高慢に対する非難です。

彼らは文字通り、砂漠の崖の高いところに住んでいましたが、

比喩的な意味でもイスラエルより上の存在だと思っていました。

その高慢さのゆえに、彼らはバビロンがエルサレムを破滅させに来た時、

ただ傍観しただけではなく、自らその破壊に加わったのです。

そのため、神はオバデヤを通してエドムを高みから引きずり下ろされて

滅びると宣言しました。

イスラエルにした仕打ちは、彼らの頭上に返されるのです。

そしてエドムがどのようにして破滅を迎えるかと言う話が

続くかと思いきや、15節で話題がいきなり変わります。

主の日がすべての国々に近づいていると。

どうして突然エドムから全ての国々になっているのでしょうか。

この箇所はオバデヤ書の前半と後半をつなぐ要（かなめ）になっているのです。オバデヤは後半で話題を広げ、主の日はエドムだけでなく、すべての国々に来る。エドムのように振る舞う高慢な国々はすべて神の裁きに直面する。彼らは高みから引きずり下ろされて滅びると言っています。前半はエドムについて 後半はすべての国々について語っている。この2つのセクションの構造を考えると、オバデヤがなぜこの小さな南の隣国を重要視したかが分かります。オバデヤはエドムの高慢が打ち砕かれるのを神がいつの日かすべての国々の高慢を同じように打ち砕かれることの実例として見ていたのです。ヘブル語ではエドムという言葉が人間という意味のアダムと同じ綴りであり、これは偶然とは思えません。オバデヤにとってエドムの栄枯盛衰は神が主の日にすべての国々の高慢と暴力を打ち砕くことの象徴だったのです。しかし他の預言書と同様 この所は裁きで終わりません。オバデヤ書のすぐ前にあるヨエル書とアモス書を振り返りましょう。ヨエル書は主の日の後に何が起こるかを描いていました。具体的には神がエルサレムを救う新しい御業を行い、神を呼び求め、神の前にへりくだるものは救い出されるということです。アモス書の結びでは主の日を通してイスラエルの罪が裁かれた後に神はダビデの家を立て直し、イスラエルの新しい王国には、エドムをはじめ、神の名で呼ばれる国々が加えられると語られていました。オバデヤ書は国々の上に立つ神の国の希望と言うこれらの約束をより具体的に描くためにヨエル書とアモス書の後に配置されているのです。こうしてオバデヤ書は眩いくらいの希望を持って締めくくられています。神は新しいエルサレムの上に神の王国を立て、そこには誠実な残された民が住み、王国はそこからイスラエルの近隣の地域と国々に広がっていきます。こうしてこの短い書は預言者たちが描いてきた神の裁きと誠実さをより鮮明にします。遠い昔のエドムの高慢と裏切りは全人類の心の状態を表しています。私たちはエドムと同じように互いを裏切り 傷つけ、その結果 神の良い世界を壊して行きます。

しかし希望はあるとオバデヤは言います。エドムの崩壊は、神がこの世界の悪に対処し、すべての国々に平和と癒しの王国をもたらすことを指し示しています。これがオバデヤ書です。

500 字要約

オバデヤ書は、聖書の中で最も短い書であり、わずか 21 節からなります。この書は明るい内容ではなく、主題はイスラエルとその隣国であるエドムに対する神の裁きです。エドム人とイスラエル人はアブラハムの子孫であり、双子のヤコブとエサウの子孫として関係が複雑であった。

エドム人はイスラエルのバビロンによる征服時に協力し、イスラエルの町々を占拠し、難民を捕らえたり殺したりしました。オバデヤはエドム人に対して神の裁きを伝えます。最初のセクションでは、エドムの指導者たちの高慢を非難し、彼らがバビロンの破壊に加担したことを指摘します。

しかし、オバデヤ書は突然、主の日がすべての国々に近づいているという話に切り替わります。これはエドムに限らず、全ての高慢な国々に神の裁きが及ぶことを示唆しています。オバデヤはエドムの裁きを通じて、すべての国々の高慢と暴力に対する神の裁きの実例として考えています。

この書の構造は、オバデヤがエドムを通じてすべての国々に向けた重要なメッセージを伝えたことを示しています。エドムの栄枯盛衰は、神が主の日にすべての国々の高慢と暴力を裁く象徴であると見なされます。

オバデヤ書は希望も伴って終わります。神は新しいエルサレムの上に神の王国を建て、誠実な民が住むでしょう。この王国はイスラエルの近隣の地域と国々に広がり、平和と癒しをもたらします。オバデヤは、エドムの裁きを通じて、神がこの世界の悪に対処し、すべての国々に平和と癒しの王国をもたらすことを示唆しています。